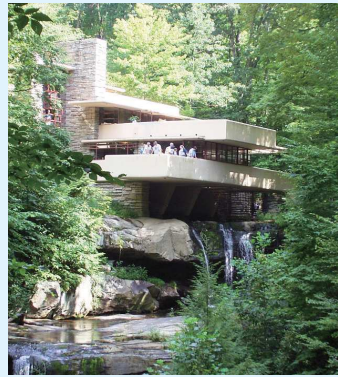


旅とインテリア④ ～お屋敷巡り アメリカ編その2～ 塚口 眞佐子



前回は、アメリカ東海岸のお屋敷群を紹介した。いずれも歴史様式をまとった豪壮な館で、その存在は観光地として地域に貢献している。では、モダン住宅ならどうか…。

今回はフランク・ロイド・ライトの名作「落水荘(1936)」とヴァルター・グロピウスの「自邸(1938)」(マサチューセッツ州リンカーン)をみてみよう。

20世紀の3大巨匠の一人ライトは、コルビュジエやミースと共にモダン建築を牽引した。グロピウスは4大巨匠のひとりとも言うべき存在で、バウハウスの初代校長として多大な影響を及ぼす。ライトの落水荘は世界的に有名で、不便な場所にありながら大勢の一般客が押し寄せる。観光バスが乗り付けビジターセンターまで備わる一大観光名所だ。



見学者でにぎわう落水荘



カフェのある落水荘ビジターセンター

一方、グロピウス邸は、私が訪れた時は見学者わずか4人と閑散としている。1934年ナチスの迫害により英国に亡命、のちにハーバード大学から招聘を受け、ボストン近郊に居を構えたグロピウスに、パトロンが援助して建てた住宅である。デザインはもちろん設備に至るまでモダニズムを体現している。建築時期は前回掲載の豪邸群の最期と重なり、同時代に併存したといえる。それを考えあわせるとグロピウス邸の先進性は驚くほどである。しかし、残念ながら過



グロピウス邸エントランス



グロピウス邸西面 / 右奥にガラス張りのポーチが見える

去における先進性は、現在の一般客には響かないようだ。

住宅の規模や話題性は落水荘にかなわない。しかし、あまりにも現代住宅であって、われわれが見慣れた造形という点が一般客の少ない理由であろう。この点はコルビュジエやミースの作品にも共通する。これらの見学者は、専門家や学生がほとんどだ。そしてもう1つの理由は、手仕事感が希薄で、工業製品を多用した建築であることではないだろうか。それこそモダニストたちの真髄である。地域を問わずインターナショナルに展開出来るデザインを彼らは訴求した。そして、その満溢した世界に私たちが生活するゆえの不人気と言えよう。

だからこそ、自然素材感や手仕事感の濃厚なライト作品が、ダイナミックな空間性も相まって人気を集めるのではないか。彼のスタジオであるタリアセン・ウエストやイーストにも一般観光客があふれる。これらは長寿命の建築と言って良いだろう。そう考えると、現代(モダン)建築のどれほどが生きながらえることが出来るのだろうか。



書籍 /GROPIUS HOUSE から転載

グロピウス邸リビングルーム

チェア=エーロ・サーリネン / サイドテーブル=マルセル・ブロイヤール / ツール=柳宗理 / 壁面アート=モホリ・ナジ (バウハウス教授)



大阪府インテリア設計士協会

〒541-0059 大阪市中央区博労町1-6-14
TEL. 06-6262-1488 FAX. 06-6262-1553

URL <http://jp-interior.or.jp/ois>

E-mail ois@jp-interior.or.jp

facebook「大阪府インテリア設計士協会」

4・7・10・1月 4回 / 年発行

発行人: 河野 洋二

編集: OIS 第1事業部会

寅 No.116

HASHIRIGAKI

葉知利書



今年こそ賑わいを・・・今宮戎 写真協力 / 奥田忠彦

年頭所感

会長 河野 洋二

会員の皆様、寒中お見舞い申し上げます。

昨年は、3度にわたりコロナ禍における緊急事態宣言の発出で、皆さんの生活や経済活動など多方面において制約を余儀なくされました。昨秋にいったん落ち着いたかと思われたところ、年明けオミクロン株の出現により、コロナ感染者は恐ろしいほどに急増しています。また悪夢に逆戻り? しかし、ここで落胆せずに、前向きにいきましょう。

さて、今年は「寅年」。我らが地元「阪神タイガース」の年です。「寅」の漢字には草木が天に向かってたくましく伸びていく様を現しているそうです。まさしく会員の皆様と共に、大きく伸びていきたいと思えます。

2年間も悩まされ続けてきているコロナ社会から早く脱して、健康で明るい社会を目指して大きく前進し躍進できる年にしましょう。



2022 初詣と新年会

令和4年の「OIS初詣・新年会」を1月8日、お初天神(露天神社)で開催しました。

参加者13人、拝殿でOISの発展と会員皆様の活躍と健康を祈念するお祓いを受け、河野会長が代表して玉串奉奠、お神酒をいただいた後に記念撮影を行いました。

その後に、近くの「がんこ曾根崎本店」に移動して、控え目に新年会を行いました。



O I Sの回想録 (8)

顧問 疋田 友一

2003年(平成15年)、私の会長在任中に、念願の「青年部会」が設立されました。前年にインテリア設計士に合格し、OIS活動に意欲的な若い会員(岡田敦氏)を新理事に抜擢し、青年部会の部長を託しました。同年6月21日、青年部会の初仕事は、当時関西で最高級と言われた39階建てタワーマンション「ジーニス大阪」(設計:東畑建築設計事務所、施工:大林組他、大阪市北区菅原町)の見学会と36階にあるスカイラウンジ「クラブジーニス」での青年部会設立総会・勉強会・懇親会でした。このマンションには、顧問の植田益夫氏(OIS元会長・SJIT名誉会長)がお住まいで、素晴らしい場所を提供していただきました。

勉強会受講者は、青年部会員の学生7名。講師は、植田顧問にお願いしました。テーマは、「やさしいデザイン(思いやりに根ざしたデザイン=簡単なデザインではない)」でした。植田顧問が(株)安井建築設計事務所・インテリア部長時代に手掛けられた仕事を例にとり、和やかな雰囲気のもとに資料・写真・図面などを用いて実践的な講義が進められました。

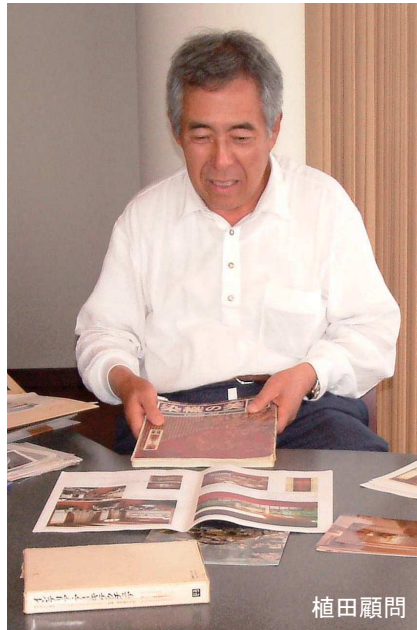
本講義のあと、次のように岡田氏が述べたことが印象に残ります。

「今回学んだことは、『コンセプトの重要性』である。本来デザインは、コンセプト無しに始まらない。しかし、例えば絨毯の色を決める時に、コンセプトに基づいているか? 『赤がいい』ただそれだけで色を決めていないか。『なぜ?』と聞かれたら『カッコ良いから』と漠然と答える。『なぜ?』に対して明快な答えがない。プレゼンテーションは、第三者に対して、まだ見ぬモノを提案していく場である。その際に『カッコ良い』だけでは説得にならない。極論すると、線一本、点一個、R一つに関してもコンセプトが求められる。『なぜ?』に打ち克つコンセプトがあってこそデザインである。その上で、『優しいデザインを!』と、声高に言われたことが大いに勉強になった。これこそが、『ユニバーサルデザイン』である。学校で勉強をするのも大切であるが、一歩外に出て、いつもと違う環境で実務家の講義を聞いて、改めて『デザインとは?』を考えさせられたことを幸せに思う。『やさしいデザイン』のすばらしさ、十分に伝わりました。『やさしさの広がり』=人へ、モノへ、文化へ…。」

本講義のあと、次のように岡田氏が述べたことが印象に残ります。



クラブジーニスにて設立総会(右端が岡田さん)



植田顧問

勉強会テーマの「やさしいデザイン(思いやりに根ざしたデザイン=簡単なデザインではない)」は、私も植田さんからよく聞き、今も自然に出てくる言葉ですが、仕事でも・人間関係でも・家庭でも、全てに『思いやり』があれば何事も上手く行く、と教えられました。

懇親会に参加した学生達は、「今回参加して良かった、勉強になった、OISの先輩からまた話を聞きたい」など、前向きな意見が聞けたことは大変良かったと思います。

インテリア設計士協会は、建築・インテリアのデザイン・設計から生産・施工、インテリアパース、大学や専門学校など教育関係の先生方、家具や造作材の製造・販売、各種資材の製造・販売、設備機器やインテリアファブリック、テーブルコーディネート、不動産業など幅広い業種に関わっている会員と賛助会員で構成されているため、それぞれの分野での専門知識と技術でのエキスパートがたくさんいます。先輩会員は、今まで経験し体験してきた知識や技術を若い会員に対して伝えていく重要な役割を担っています。このような勉強会をもっと多く企画することが会員のレベルアップと協会の発展に必ずや繋がると確信しています。

OIS役員や経験豊かな会員の方々との繋がりをもっと強くしていこうではありませんか。また、若い会員の積極的な事業への参加と、「今こんなことが知りたい、してほしい」など多くの提案・質問を切に期待しています。



引き続き勉強会

*「青年部会」は、今回述べたことが発端です。回想録(3)で、2004年1月にスキーサークルの初回、信州車山高原へ行った後、「山口さん、石渡さん、伊藤さんの若い女性3人が中心となって青年部会を立ち上げてくれました。青年部会の始まりです。」と書きましたが、次のように訂正します。「2004年に岡田部長が急遽東京へ転居したため、山口さん、石渡さん、播磨さんの若い女性3人が中心となって青年部会が再スタートしました。新青年部会の発足です。」

篆刻教室に参加して

2021.12.6

今年も、宮後先生の篆刻教室に参加しました。今回は印面も大きくなったので、去年のような失敗はしなかったと思っていましたが、開始15分で大事なところを彫ってしまい、消えてなくなりました。修復不可能との通告を受けて、やむなく別の文字に挑戦しました。参加された皆さんは細かい作業を真剣に取り組んでおり、確実に作品として完成に向かっていました。

一緒に孫姉妹が参加しましたが二人とも真剣に取り組んだようで、初心者にしては直される場所も少なく、大喜びで完成した石印を持ち帰りました。



宮後随想先生

ここで、私と何が違ったのか判明しました。彼女達は、指に豆ができる程の力を加えて、脳目もふらず慎重に彫ったようです。技術ではなく、向かう姿勢が間違っていたのだと知り、恥かしくなりました。

慌ただしい年末に、篆刻に向き合う無心の時間は、無言のようにみえて、実は、石に多くを問うているのだと思うに至りました。



川野さん

宮後先生に毎回楽しくご指導いただけるのはありがたいことですね。自分を見つめ直すこともできる篆刻の直伝をしていただき、今年も感謝いたします。(記・川野 京子)



筆者の作品「真」

秋の和風講座

円成寺見学記

2021.11.23

まさに冬到来と感じる寒さの中、新型コロナウィルスも少しおさまり、しばらく中断していた和風講座の再開です。今回、コロナ前に企画されたいた奈良の円成寺を訪れました。円成寺は平安時代末期に再興された古刹です。

近鉄奈良駅から30分ほど、車窓から秋の彩りを感じながら、バスに揺られて到着。山門をくぐり、まず目に飛び込んでくるのは、浄土式の園池。広大な敷地に計画的に配置された植栽や島の数々、池とのバランスの良さも素晴らしく、気持ちをとても落ち着かせてくれるものでした。



桜門

そして、階段を登り本堂へ。本堂は寝殿造の対屋(たいのや)を移設した建物と言われており、よく見ると開口部の位置などが左右非対称。しかし、全く違和感なく堂々とした存在感を醸し出し、そこに屹然と建っていました。本堂の内部空間は、美しく整った配列の化粧垂木、凝った柱の装飾画、外部から入る柔らかな光、平安時代の住まいの雰囲気を感じることができました。建築と庭を一体として考える。お互いがそれぞれの良さを



本堂(阿弥陀堂)

引き出すその関係性は、今の住宅においても、とても大事な事であると気付きました。

やはり建築空間は実際にその場に行き、じっくりと見て、周りの音を聞き、体感することで初めてその良さが分かります。コロナ禍で外出も減り、忘れかけていましたがこれが最も大事であるということを再認識した見学会となりました。

(記・西脇 利彦)

